

●教育活動編

部活動

現在の中学校教育において、部活動は大きな比重を占めている。

たとえば PTA が編集する当該校の新聞で新たに着任した教師を紹介する際には、担当学年や教科と共に、担当する部活動が紹介されるし、そこで中学時代の思い出をインタビューされたとすると、その主な話題の一つが部活動だったりする。

また小学校から中学校に進学する際に何をしたいかと問われた生徒は、かならず入りたい部活動を上げることが多い。

しかし部活動は、中学校の教育内容を規定している学習指導要領にも定められてはならず、課外活動なのだ。

なのに多くの学校では、生徒はみなどこかの部活に所属しなければならぬし、教師もまたどこかの部活を担当しなければならぬ。

教育活動としてやらねばならないわけではない部活動。しかし生徒は義務として参加させられ、教師はまたこの活

動に従事した分は給与に反映されない無給の活動であるにも関わらず、教師も義務として担わされている。

そして部活動は、正規の教科の学習が終了した時刻。多くの学校では午後3時から始まり、夏なら午後6時の最終下校時刻まで、冬なら午後5時の同じく最終下校時刻まで実施されるだけでなく、多くの部活において、午前8時半の始業の前、午前7時頃から8時20分ほどまで始業前の活動が実施され、さらに学校の休業日である土曜・日曜でも実施される。さらには文化部なら、市連合文化祭と言って、全市の文化部、例えば音楽系や美術系、さらには社会科系などの部活が集まって行われる連合発表会は、正規の授業を平日の午後を削って実施されるし、運動部系ならば、同じく正規の授業を平日の午後を削って実施される市の部活動大会という形で、実施される。

中学校において部活動は大きな比重を占めているのだ。なぜやる必要のない部活動が、現在の中学校教育で大きな

比重をしめているのか。

この歴史を遡ると、戦前、古くは明治時代の大学や高等学校においても課外活動である部活動が大きな比重を占め、これが中学校においても生徒の集団的意識を醸成する格好の「教育活動」として認識されていた。さらに第二次世界大戦中に小学校と中学校の間に設置され、おおくの生徒が進学した青年学校でも実施されたことで、戦前の学校教育においては、青年学校・中学校・高等学校・大学に至るまで、どの学校にも部活動は設置され、生徒・学生の集団意識を醸成する格好の場とされたことが、戦後にも継承された。

ただし戦前の各学校における部活動は、学校ではなく保護者が運営する形をとっており、教師は保護者の依頼をうけてこれを担当する形であった。

大戦後の新憲法と教育基本法の下で新制中学校と新制高等学校が発足した際には、課外活動として部活動がそのまま継承され、今度は保護者の要請ではなくて、学校の責任として設置され、教師にも生徒にも義務化された。

こうして部活動は戦後においても教育活動において大きな比重を持ち、特に1964年の東京オリンピックを控えた時期には、オリンピック選手を養成する機関として各学校の部活動は注目され、それまでは県を越える地域での運動部の大会は認められていなかったものを県を越えた全国レベルの大会が実施されて中学生や高校生もそれに参加するようになる、各スポーツの全国連盟の下部組織として、各県や市町村

の部活動スポーツ連盟が組織され、中学や高校におけるスポーツ系部活動は、その最末端の選手養成機関として位置づけられるようになった。

こうなると部活動は教育委員会や文部省の手を離れ、それからは自立したスポーツ連盟の下部組織として位置づけられ、課外活動なのに学校教育に大きな比重を持つようになり、各学校の部活動は、これらの大会を勝ち抜くことが目標とされていったのだ。

同じことはスポーツ系以外の文化活動についても言え、例えば合唱や器楽合奏の地域組織が結成され、市町村や都道府県単位の大会や全国大会も組織され、各学校の部活はこれらの下部組織の様相を呈して行った。

全国組織のない科学系部活動は、文部省が主催する理科学研究発表会を全国大会として、各都道府県や市町村単位の発表会が組織され、それぞれの大会に各学校の部活が発表し、これらの文化発表会もコンクール形式が採られたため、各学校の文科系部活動もまた、これらのコンクールを勝ち抜くことが目標とされるようになった。

こうして欧米のように、スポーツや文化活動などの学校とは無関係な地域組織が主体となって行われる国々とは異なり、日本は学校がスポーツや文化活動の国家レベルでの人材養成機関として組織されたことで、学習指導要領に定められた教育活動ではない部活動が、学校教育の中で大きな比重を占めるようになったのだ。

したがって私も、1974年4月に川崎市立柿生中学校に新任社会科教師として赴任して以来、2003年に川崎市立西高津中学校を退職するまでの29年間、部活動を指導せざるを得ない環境に置かれた。

このため部活動もまた、私の教育活動に於いて大きな比重をしめることとなったわけだ。

1…柿生中学校時代

1974年4月に川崎市立柿生中学校に赴任した際も当たり前のようにして一つの部活動が私に指導すべきものとして指定された。

卓球部。

これまで何年も指導してきた教師が転勤してしまい、指導できる教師がいないということが、私が指名された理由であった。

運動は大嫌いで大の苦手だからできないと言っても、部活動のまとめ役をしていたベテラン教師は聞き入れてはくれず、私は仕方なく卓球部を指導する羽目に陥った。

大学で教育史を勉強して来たので、部活動が指導要領に定められた教育活動ではなく、教師が指導すべきものではないことを知っていた私でも、これはやらざるを得ない状況であった。

しぶしぶ毎日の放課後の練習に付き合い、土曜の午後や日

曜日の練習試合にも付き合ったが、そもそも卓球などやったこともなく、生徒と一緒にやったところで上達するわけもなく、早く一年経って新年度に、卓球を指導できる人が転勤してこないかと、その日を待ちわびる日々であった。

幸いなことに翌年、1975年の4月に、それまで向ヶ丘中学校などで卓球を指導してきた人が転勤してきたので、卓球部の指導はさっさとこの方に譲り、私は、自分の得意とする歴史で、歴史研究部を創設したのだった。

●柿生中学校歴史研究部

1975年4月に創立したこの部は、前途多難だった。

そもそも私が大学で専攻したのは東洋史。東洋史演習で学んだのは、玄奘三蔵の「大唐西域記」がテキストであり、その冒頭部分、タクラマカン砂漠の西域諸国を旅した部分を、漢文の原文で読み解くことであった。

そして卒業論文で選んだ題材は、「古代日朝関係史研究史上の諸問題」というもので、如何に明治以後のこの古代史研究が、皇国史観に色濃く掬めとられており、そこで出来上がった歴史像はかなり歪んだものであったという問題を取り扱ったものであった。

したがってこのテーマで一年間これまでの研究書や論文そして資料を読んだので日本古代史についてはかなり詳しくなったものの、中学生を相手に歴史研究を行うには、何をどう

してよいのやら、皆目見当もつかなかった。

とりあえず思いついたことは、巨大前方後円墳の模型を、紙粘土で作ることと、粘土を手に入れて土器を焼いてみることであった。

最初の1975年は確か、新聞紙を水に浸してのりを加えて作った紙粘土で、大阪府にある伝履中陵古墳の詳しい実測図を元にして、何十分の1かの模型を作ることであった。そして翌年の1976年はどこかで粘土を手に入れて縄文土器でも復元してみようとしたが、そもそも粘土を掘りだせるところが近くにあるかどうかはわからず、縄文土器を野焼きで焼こうにも、校庭に浅い穴をほって薪を大量にくべて焼くわけであり、その場所の確保と薪の確保もままならず、結局実施できずに終わった記憶がある。

したがってせっかく作った歴史研究部も1976年には事実上の休部状態に陥ってしまった。

やることを見つからないということと、私自身が最初の二年間は生徒会本部指導という担当についていたため、合唱コンクールの計画と実施、そして文化祭の計画と実施という大きな仕事があったので、放課後の時間がなかなかとれないという事情もあったと思う。

この休部状態が転換したのは、1977年12月の一年生による麻生台横穴古墳群発見であった。

ここからあとは、2025年9月にまとめた「柿生中学校

考古学研究部のあゆみ」に基づいて記してみよう。

2025年1月にふと思いつき立ち、2010年に柿生中学校校舎が新しく建て替わる際に校舎内に設けられた「柿生郷土史料館」に、柿生中学校考古学研究部の研究成果とその関係資料を一括寄贈した。

寄贈したわけは、この活動成果は部数限定の機関誌として印刷して関係者に配ったことと、何度か参加した市連合文化祭の社会科学部会での研究報告だけだったので、部関係者と私がいなくなれば、この活動の実態もその研究成果も埋もれてしまうと感じたからだ。この活動が1990年に終わってすでに35年。活動した生徒らも50歳から60歳となり、私もすでに75歳。

残された時間があまりない、との思いからだ。

そして研究成果が特別展示という形で公開され、その中でカルチャーセミナーとして研究報告をすることとなり、手元にあった寄贈した資料を基にして、その詳しい足跡をまとめてみた。

特別展示は、2025年の7月13日(日)〜11月9日(日)の期間、「横穴古墳の研究」としてなされ、1984年にまとめた、柿生地区の全横穴古墳の詳細な実情をまとめた「古墳時代の柿生」第4版の展示と、この横穴古墳群発見の経緯を記した調査ノート、そして20数基の横穴古墳の実測図面などを展示する形で実施され、さらにカルチャーセミナーは、「柿生中学校考古学研究部による横穴古墳群の発見と調査」

という題で、2025年10月25日に、横穴古墳を発見した一人の藤本君と東明君、横穴古墳を実測した一人の三浦君を迎えて、詳しい資料をもとに報告された。

●柿生中学校考古学研究部のあゆみ

〈1975年〉

・1975年4月社会科教諭川瀬によって歴史研究部創設される。しかし活動する内容に乏しく、二年後には事実上休部状態。

〈1976年〉

・10月市連合文化祭に、社会研究クラブとして、従来の専門家による研究の概略（町田市域の横穴古墳群＋川崎市域の古墳＋早野横穴古墳）をまとめた「古墳時代の柿生」（スライド＋パンフ）を発表。

※この時代は、教育課程内にクラブ活動が設けられており、週一時間の割り当てで様々なクラブ活動が設けられ、全生徒がそれぞれに所属するものとされていた。私は社会科関連のテーマを研究する社会研究クラブを作った。丁度この年は順番制で市連合文化祭社会科の部に生徒発表をすることになっていた。地域史をテーマにすることとし、クラブ員を引率して、この地域の横穴古墳や高塚古墳を巡って写真撮影して資料を作った。クラブ活動は木曜の5時限目だった。

〈1977年〉

・4月以後、社会研究クラブでは、昨年10月の市連合文化祭での発表スライドを鑑賞。新たに柿生地区古墳分布図の作成にはいる。

・12月14日、このスライドを見た社会研究クラブ員の1年生（藤本・東明）が、通学路の途中にあたる麻生台団地の給水塔横の工事現場で、横穴古墳らしきものをみつけ、翌15日木曜日のクラブの時間に分布図を作っている際に話題に。すぐ1年生クラブ員に3年生も加わってみんなで調べにいき、教育委員会の文化財係に連絡。

・12月16日金曜日に再度市教委に連絡したところ、事前調査を依頼され、同日放課後、麻生台団地の工事現場主任に状況を聞き取り。現在削平中に崖に見える横穴以外にも一つ、以前工事中に出土。瓦礫で埋めたことを確認。

・12月17日土曜日の放課後は二度目の調査。すでに工事が進行して穴に近づけないので、脚立を立てて、そこから望遠レンズ付きのカメラで奥壁壁面や見える限りの側壁や床面を確認して写真撮影。奥壁に「明和二年」の線刻を確認して防空壕ではないことを確認。さらに卒業生らしき名前の線刻も複数確認。

・12月18日日曜日。横穴近くの碓井勇治氏に聞き込み。
・12月22日木曜日。放課後引き続き付近を聞き込みし、仲村・亀井横穴の存在を聞き取る。

・12月23日土曜日。午前中に市教委来校。川瀬は共に現

地調査し、横穴古墳と確認。工事会社や県教委とも確認して調査日程を決めるとのこと。放課後周辺の聞き込み調査。白山横穴の存在を知り、すぐ現地調査（白山2区2号）。さらに花島横穴の存在を知る。

・12月24日日曜日。花島横穴を現地調査し、簡単に実測。その後付近をさらに聞き込み。ここで王禅寺口にも多数の横穴があることを知る。

（1978年）

・1月12日木曜日。放課後王禅寺口の横穴の現状を確認。これが後の1区。

・1月14日土曜日。放課後。聞き取り調査後、仲村横穴の現状確認と調査。

・1月19日木曜日。放課後引き続き仲村横穴・亀井横穴の調査。

・1月21日土曜日。仲村1区の調査。1号は炭焼き穴に再利用されており略測も困難。2号を略測。

・2月5日月曜日。仲村1区及び2区を略測。

・2月8日水曜日。この日から麻生台横穴群の市教委による調査開始。14日間。発見した生徒たちは毎日放課後調査に参加させてもらう。

・2月18日土曜日。白山2区の写真撮影と略測。

・2月22日水曜日。東京新聞川崎版に「麻生台団地西側ガケに古墳が三つ―柿生中生二人が見つける」との見出しで古

墳発見と調査終了の記事が載る。藤本らは毎日放課後調査に参加とも記される。

※ここまでの二か月で麻生台の三つの横穴以外に、仲村1区に2基、2区に2基、亀井に2基、花島に1基、白山に3基（後の2区）、王禅寺口に5基（後の1区）合計18基の横穴古墳の存在を確認し、写真撮影や略測を行う。参加したのは1年生、藤本・東明・杉本・野島、3年生の会津・松川・松浦・矢吹。

・3月。調査に参加した3年生メンバーが卒業。

・4月社会研究クラブの2年生メンバーが歴史研究部に入部し、部を再興（部長・藤本隆2年）。新部員が1年・2年・3年と多数入部し30名規模に。しかしここまですでに柿生地区の横穴古墳の実態説明はほぼ終わり、以後聞き込みを継続。

・4月5日水曜日。東京新聞に「麻生台横穴古墳から多数のガラス小玉と刀子鉄片が三号墳の床の土を水洗いしたところ確認」との記事が載る。藤本ら2年生4人も資料整理に参加と記される。

・10月文化祭に従来の専門家による横穴古墳データに新たに見つけた古墳群を追加した「古墳時代の柿生―柿生の横穴古墳の特色」第一版を発行。このパンフは、部員の中でパンフチームを作って、生徒自身が様々な資料を参照して作り上げたもの。

※78年中に早野横穴古墳以外に霊園には横穴が5基あることを発見（従来の横穴を2区とし霊園入り口外で見つけたものを1区とする）したが日時不明。また王禅寺口もその東側30mほどに多くの横穴を見つけて2区としたが、その日時も不明。この場所は4月に一年生として新たに入部した吉垣君の家でもあるので、再調査して見つけたか？「古墳時代の柿生」第一版の序に自分たちで見つけた24基とある。78年初までの18基+王禅寺口2区5基・早野1区4基・2区1基の合計28基。ということは、78年10月の時点ではまだ、早野1区は見つかっていないということか？このあたりは調査ノートに記録がないので不明。

※この年横穴古墳の調査が一段落した段階で新たな課題に挑戦か？「古墳時代の柿生」第一版の序に「土器に手を広げる」とある。土器を焼いてみようと試み新百合の造成地にむき出しの粘土を見つけて手に入れ、野焼きは危険なのでドラム缶で焼いて、縄文土器のつもりが須恵器状の固い土器が出来たのはこの年か？翌年79年か？

（1979年）

・4月考古学研究部と改名（部長・藤本隆）。
・6月に花島横穴が宅地造成のために一部削り取られたことがわかり、実測を行う。

・10月の文化祭で「古墳時代の柿生―柿生の横穴古墳の特色」第二版を発行。

※この年、岡上で川井田下横穴が宅地造成中に見つかり12月27・28日に市教委が調査。2年生藤本ら生徒有志が調査に参加。

※花島横穴を実測するにあたり、藤本らが麻生台古墳群を発掘した高津図書館友の会郷土史研究部を組織した専門家たちの助言を受け、学校下の金物屋でメジャーや水準器、測量糸などを購入し、さらに工事用の鉄の棒を50cm単位で切ってもらったものも購入して、花島横穴の実測を行った模様。この活動が後の全横穴実測活動の基盤となった。

※地域の古老を尋ねての聞き込み調査で多くの横穴古墳を見つけたわけだが、すでに情報は途絶え、78年79年は、柿生の山に入ってここぞと思う箇所には測量用の鉄棒を指してみても、地下に穴がないか探す日々となった。だがほとんど成果はなかった。

（1980年）

・3月に麻生台横穴群を見つけ、以後調査を推進してきた一期メンバーが卒業。

・4月以後調査は1978年4月入学組と79年4月入学組、そして80年4月入学組に受け継がれる（部長・小野寺一海）。
・10月の文化祭で「古墳時代の柿生―柿生の横穴古墳の特色」第三版を発行。

・11月15日。白山古墳群の1区横穴群（3基）の存在を確認。

※このころは聞き込みをしても新たな発見はなく、といって本格的発掘調査は資格がないのでできず。部としてもやることもなく無為に過ぎす日が多かった。これを打開するために顧問の提案で、ドングリをあつめてきてあく抜きをして、粉にして団子にするなどの新たな取り組みを実施か？

〈1981年〉

・4月部長・井山謙一。
・春、市教委の依頼で調査している東原氏が柿生地区の横穴古墳全部を実地調査（卒業生藤本らが案内）。

東原氏からの依頼で、市の文化財調査報告書に報告を掲載するため、すべての横穴の再調査をし、実測することを依頼される。夏から翌春にかけて実施。78年4月までに見つけた18基に加えてさらに13基見つけていた（王禅寺口2区・5基、早野1区・4基、早野2区1基、白山1区3基）。

★実測の開始

・6月8日月曜日～10日水曜日 仲村1区1号・2号を実測。初めての实測で時間がかかってしまった模様。
・7月12日日曜日・8月12日水曜日。仲村2区1・2号。調査は夏休みに突入。

・8月13日木曜日。王禅寺口1区1号。
・8月14日金曜日。王禅寺口1区2号。
・8月17日月曜日。王禅寺口1区3号。

・8月18日火曜日。王禅寺口2区1号。
・8月19日水曜日。王禅寺口2区2号。
・8月20日木曜日。王禅寺口2区3号。

調査は2学期にも継続。

・9月12日土曜日。早野1区3号。
・9月13日日曜日。早野2区2号。
・10月17日土曜日。白山1区2号。

※10月末の文化祭には79年の文化祭に発表した「古墳時代の柿生―柿生の横穴古墳の特色」の改定第4版を発表。この年の実施データを入れ、詳細な地図を掲載。

文化祭後も実測調査は継続。
・12月19日土曜日。仲村1区1号。

〈1982年〉

年初も実測調査継続。

・1月16日土曜日。早野1区1号。
・1月23日土曜日。白山2区3号。
春休み中も実測継続。

・3月29日月曜日。白山2区2号。

※ここまでの実測は井山（82年卒）・三浦、江原、上田（83年卒）・大矢（84年卒）らが行う。実測可能だった17基

分。横穴内での実測は男子部員が担当。女子部員は入り口外に控えて実測数値の記録と図面作成を担当。

※この81年度か？ 周辺の横穴古墳との比較を始め、多摩区登戸の長者穴古墳群や、町田市域の白坂・西谷戸・下三輪古墳群や、横浜市域の都築郡の中心地帯にある長津田横穴群や都築郡の中心古墳群である前方後円墳からなる稲荷前古墳群を調査したのは。

・ 4月部長・久保田勤。

年度が替わっても実測調査は継続。

・ 6月12日土曜日。白山2区1号。

※これを持って約1年かかった実測は終了。このデータを図面に起こして奥壁図や断面図などをつくり、市教委に提出。84年11月30日刊の「文化財調査収録第20号」掲載の東原氏による柿生の横穴古墳群のまとめ論考の調査記録のデータとして掲載される。

※以上迄を、2025年10月25日のカルチャーセミナーで報告した。



(麻生台古墳群調査に参加した1年生社会研究クラブ員・左から、野島・藤本・東明・杉本 1978.12.23 撮影?)



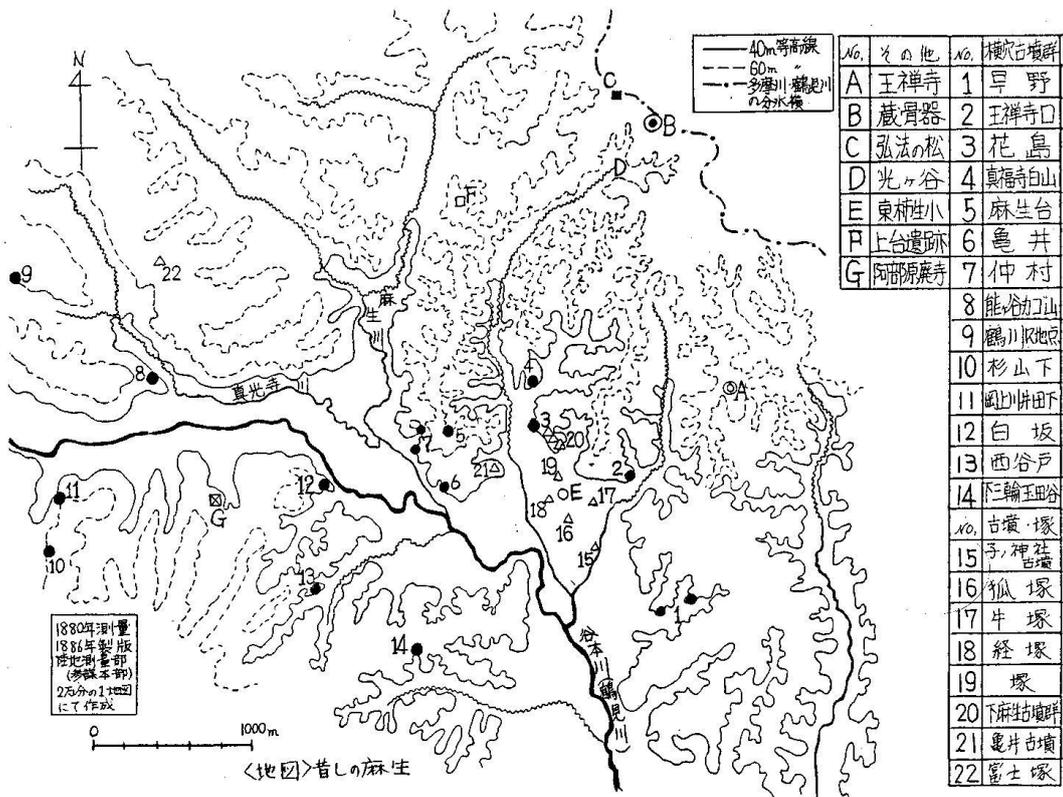
(麻生台古墳群：1号横穴・発見時の状況)



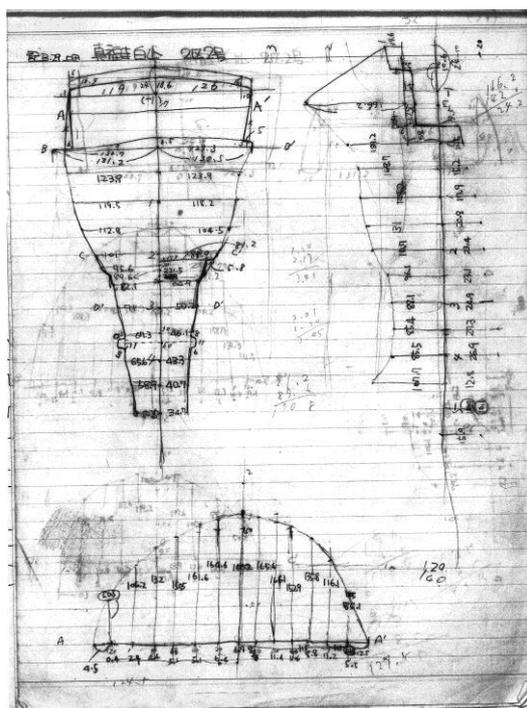
(右上：3号横穴：床面の敷石)



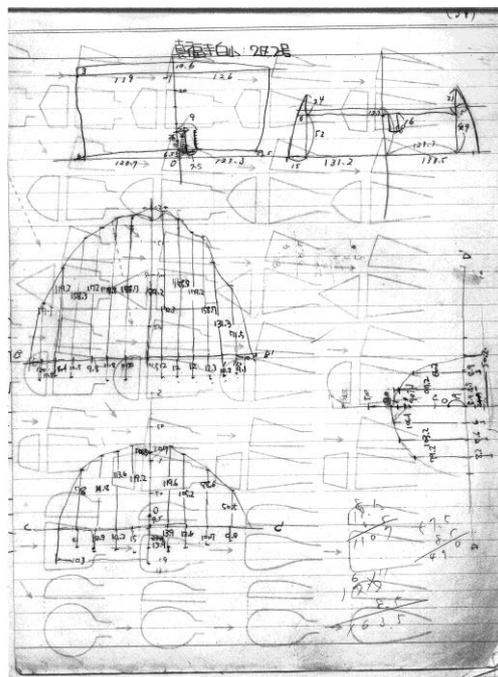
(右下：2号横穴：床面敷石を取った状況：排水溝と玄室と羨道境石)



柿生周辺の古墳分布図



(白山2区2号実測図：
上左：平面図 上右：断面図
下：奥壁断面図)



(白山2区2号実測図：
上段：左棺座平面・右棺座正面
下段：断面図)

・10月の文化祭では何をしたか。1年かかった実測データを「古墳時代の柿生―柿生の横穴古墳の特色」の改定第4版に書き込み、さらなる改定第5版の準備はできていたが、記録がないので不明。

〈1983年〉

・4月部長…大矢高弓。

横穴古墳の調査が終わりやることがなくなり、新たな課題を見つげるために顧問による柿生地区の歴史講義を始める。史料は江戸時代編纂の新編武蔵風土記稿。

この学習の成果から翌年「王禪寺伝説」班が作られる。そもそも始まりは東柿生小学校を囲むように存在した4つの塚。この塚に囲まれた地域に元は王禪寺がここにあったという伝説があり、これに注目した結果。

〈1984年〉

・4月部長…日向治郎。王禪寺伝説班・昔の人の生活班を創設。王禪寺伝説班は王禪寺の開闢の歴史に迫る。むかしの人の生活班は、女子部員たちが結成。

・10月文化祭にて、横穴古墳群調査終了を記念して、早野壁画古墳と麻生台3号墳の実物大模型+実測図面を元に全横穴の縮尺模型を展示+昔の人の生活班は縄文から古墳時代の服の復元(実際に着用して練り歩く)。

※以上をもって考古学研究部による横穴古墳群調査は終了。

※この年の「王禪寺伝説」班は

- ①「4つの塚」についての資料収集。
 - ②土地の人々への「聞きこみ調査」。
- を行って課題に取り組んだ。

（1985年）

- ・4月部長・増田直弘・副部長・福田徳子。麻生不動尊班と亀井城班を創設し、麻生不動尊・亀井城の由来に迫る。
- ・10月文化祭には王禪寺伝説班・麻生不動尊班・亀井城班・昔の人の生活班の研究成果を発表。

※この年の「王禪寺伝説」班は

- ①王禪寺に関わる諸伝説の検討作業。
- ②奈良時代における「小仏像（だいたい30cm以下）」の実例とその使用目的の調査。

③小仏像にかかわる、全国の伝説の調査。

④観音信仰と真言宗についての研究。

⑤弘法大師の足跡とその一生についての研究。

⑥仏教が関東地方にいつ伝わったのかについての研究。

⑦古墳時代～平安時代の麻生地区の社会状況についての、考古学資料による研究。

に取り組んだ。まだインターネットのない時代故、柿生中の図書室だけでは足りないもので、多摩図書館や新設の麻生図書館に通って、地域史や古代の歴史や仏教に関わる本を読破してとりくんだ。

※「麻生不動尊班」は麻生図書館に通ったり、地域の人に尋ねたりしてその由来を尋ねたが、

①縁起によると、鎌倉寛園寺開山・開基・願行上人が不動尊三体を作り、一体は自坊に、他の二体を相模の大山（雨降山）と武州麻生郷不動院に安置したという。

②伝説では、昔、ある村人が木賊ヶ原でトクサを刈っていると、八寸程の不動尊が見つかった。これが麻生不動の本尊で、良弁作といわれる。

との二つの伝説があるとわかっただけだった。

※「亀井城」班は麻生図書館で地域史の資料を調べたが、

①亀井住宅の場所に城跡があり、その城主は源義経の家来の亀井六郎だと伝えられている。

②亀井城存在の記録は、亀井住宅の東にある月読神社の碑文に「当社は、約四百五十年前、武蔵国都筑郡麻生郷の領主、小島佐渡守が、うち続く応仁戦乱の苦悩にあえぐ領民のため、天文3年（1534）9月29日、亀井城の卯の方（東）に社殿を建立」とある、ことしかわからなかった。

（1986年）

・3月 昨年10月の文化祭発表をまとめた考古学研究部機関誌「あしあと」第一号発刊。地域史研究の成果をまとめた冊子として発刊し、関係各所に配布。

・4月部長・讃岐賢一。

・10月市連合文化祭に『幻の観音像』―王禅寺伝説の解説
(その2)』を發表。

※この年の「王禅寺伝説」班は、神奈川県史に収められている資料で、1650年に改写された「閻浮檀金聖観音略縁起」を中心に考察していった。

そして

①孝謙天皇と仏教についての研究。

②無空上人の足跡とその一生についての研究。

③1寸8分の観音の実例の調査。

④王禅寺略縁起「閻浮檀金聖観音略縁起」の検討作業。

を通じて、自分たちの仮説を組み立てていった。

※この「王禅寺伝説班」はとても意欲的であった。創設メンバーの讃岐・鶴井両名がそれぞれ王禅寺の開闢伝説について独自の仮説を建て、これに大矢も加わって論議し、最終的には讃岐の「1寸8分観音像は現観音像の胎内仏として伝えられる」との説に落ち着いた。自分たちで多摩図書館や開設されたばかりの麻生図書館にも通って文献を調べ、少ない資料を基に推論を重ね、王禅寺開闢の歴史を探究した。このため市連合文化祭での発表に際しては、助言者の大学教授の質問にも自分たちで適切にこたえるだけでなく、出された疑問点にも、逆に反論を加えるなど、研究成果を遺憾なく発揮した。

※「麻生不動尊」班は昨年みつけた二つの伝説をさらにしらべ、

①願行上人が不動尊像を作ったのは大楽寺であり、その寺が明治の廃仏毀釈で壊されたあと、近所の覚園寺に移された。

②上人が作った不動尊像は鉄製である。

ことが分かり、大山寺・覚園寺・麻生不動にある不動像がそれぞれ鉄製であることを確かめる必要があるとわかり、それぞれの寺を尋ねてみたが、突然訪ねたのでは見せてもらえなかった。

※「亀井城」班は

①城主とされる亀井六郎については、紀伊の鈴木氏の出という資料と、近江の佐々木氏の出という紀伊の鈴木家の家伝の資料と二つある。

②城跡と言われるところに潜って、大手道と言われた所から亀井の岡を取り囲むような幅10mぐらいの平地が崖の途中にあることを見つけた。

※資料

閻浮檀金聖観音略縁起

夫、当寺(注1)本尊閻浮檀金(注2)の聖観世音菩薩(唐土铸造1寸8分)、人王四十六代孝謙帝の御宇(天平宝字元ノ丁酉歳)、天皇観世音の夢想得玉ひ、大徳の律師某に勅命あり、武州都筑郡二本松といふ所谷の間に大悲(注3)の靈像在す、汝行て是お招請せよと有、依之、律師彼地に錫お飛して岩窟の間に禅観お凝らしければ、岩洞の透より光明お放し尊像飛んで律師の袖に移り玉ふ、即ち、聖観世音の銅像なり、

律師是ヲ護持して帝都に帰り、事縁の始終お奏聞し奉る、帝聞召玉ひ叡感浅からず、勅して堂舎を造宮せしむ、時に毎夜天より星宿下りて、光明普く近辺お輝しければ、終に俗呼んで星降山と号す、後に星宿山と改ル、律師王命お蒙りて禪觀の地とすれば、寺お王禪と名付、各々奏して勅許お蒙り奉る、尚許多の寺封建お玉ふ、是より宝前に觀音經（注4）お長日修し、天下安生五穀成就お祈る、是故に東国勅願所と成ぬ、その後乱生の兵火に罹り堂舎全く焼亡せり、此時尊像火中お飛び玉て、今の地の檜の古木にうつり、毎夜光明お放し玉ふ、土人觀音の光明なる事お知らず、初めに樵夫も怖れて山に入らず、後には唯夜光木と号せり、本の二本松は徒に亡地と成ぬ、しかして数百年の星霜を経て、人王七十五代崇徳院の御宇、往古の御例の如く今帝觀世音の靈像お得られ、勅して今夜光木の地に就、堂舎御營建あり、件の尊像を安置し、本坊に添て六院お造り、供僧六口を住せしめ、衣食の地お宛行ひ玉ふ、小田原北条氏直公より多くの寺領お御寄付有、其後、御当家に至り、かたじけなくも、御朱印三十石お賜り、寺境の繁榮旧時倍し、人法興隆の淨刹となりぬ、しかふしてより大悲の利生も広く輝きて、道俗帰依薄からず、ひとえに將軍家の御武威の然らしむる御事、誠に仏法王法は車の両輪と、世上のことわざも誣べからず、一山の人法尽期有べからすと、御代万歳の威光お感じ奉る也、今の地に堂舎安置の時、仏士法橋運慶をして、四尺余の木像お造らせ、閻浮檀金の小像お其胎内に納め奉る也、

慶安三（庚寅）年十一月改寫

王禪寺

快尊

（川崎市多摩区王禪寺 志村 文雄氏蔵）〔神奈川県史資料編8 近世（5下）所収〕

（注1）原文では「当時」となっているがこれでは意味不明であるので、文脈上意味の通る「当寺」とした。

（注2）これは仏教用語で、人間世界に産出する金という意味。

（注3）これは、觀音菩薩の別名である。

（注4）原文では「觀音供」となっていたが、意味不明なので、文脈上意味の通る「觀音經」とした。

（1987年）

・3月 昨年10月の文化祭発表をまとめた考古学研究部機関誌「あしあと」第二号発行。

・3月 王禪寺伝説班の中心メンバー全員（讚岐・鶴井・大矢）が卒業。

・4月 部長・伊藤悟。

※この年部長など三年生は事実上の幽霊部員。二年生はおらず、四月に入部したての一年生8人が実質活動を担った。1年生メンバーは、「王禪寺伝説研究」「麻生不動尊研究」「亀井常研究」の3テーマの中から「亀井城研究」を選択。亀井城

について一つの進展があった。6月に亀井城の地形班が亀井城と思われる斜面の竹やぶに潜ったところ、麓からの大手道と思われる道の先に、曲輪や腰曲輪と思われる平地を発見し実測。現在残る亀井城が戦国時代のものである可能性が浮かぶ。

※時代による城の変遷を実感するために田中祥彦著「多摩丘陵の古城址」(有峰書店刊)を参考に、町田市域の小山田城・沢山城、横浜市域の茅ヶ崎城、小机城などを実地に踏査(日時はこの年の8月に小机城址、9月に荏田城址・茅ヶ崎城址をフィールドワーク)。

亀井城調査には、現存地形の確認と、城主とされる亀井六郎の面から歴史を追うことが必要との判断で、二方面から調査を進めた年であった。

・10月文化祭に亀井城あとの斜面に見つけた大手道・腰廓らしき遺構と、これを戦国時代の城跡と推定して城主は小嶋佐渡守ではないかとの推論を発表。

※貴重な遺構を発見しておきながら、これを市教委に連絡して、専門家による調査につなげられなかった。これが結果として、後のマンション建設で遺構が未調査のまま破壊されることに繋がる。きちんと動けなかったのは、9月になって新年度の新入生の数が分かって来た中で一学級減となることが判明。社会科教員が一名移動せねばならず、もともと在職期間の長い私を校長は指名。これを撤回させるべく工作していた結果として、亀井城の遺構の保存調査に時間を割くことが

できなかったことは極めて残念である。

〈1988年〉

・3月 昨年10月の文化祭発表をまとめた「あしあと」第三号の発行準備を進めるも、突然の顧問転勤で中挫。

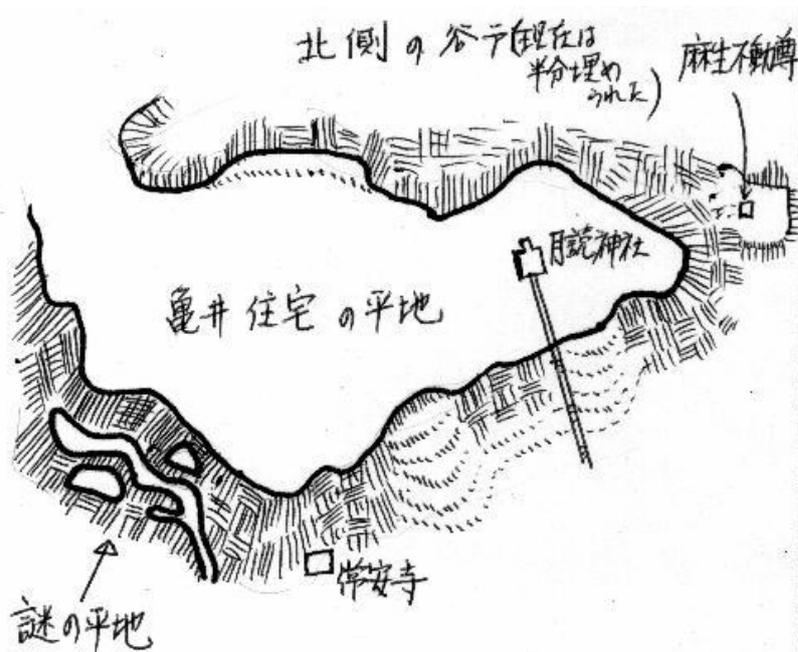
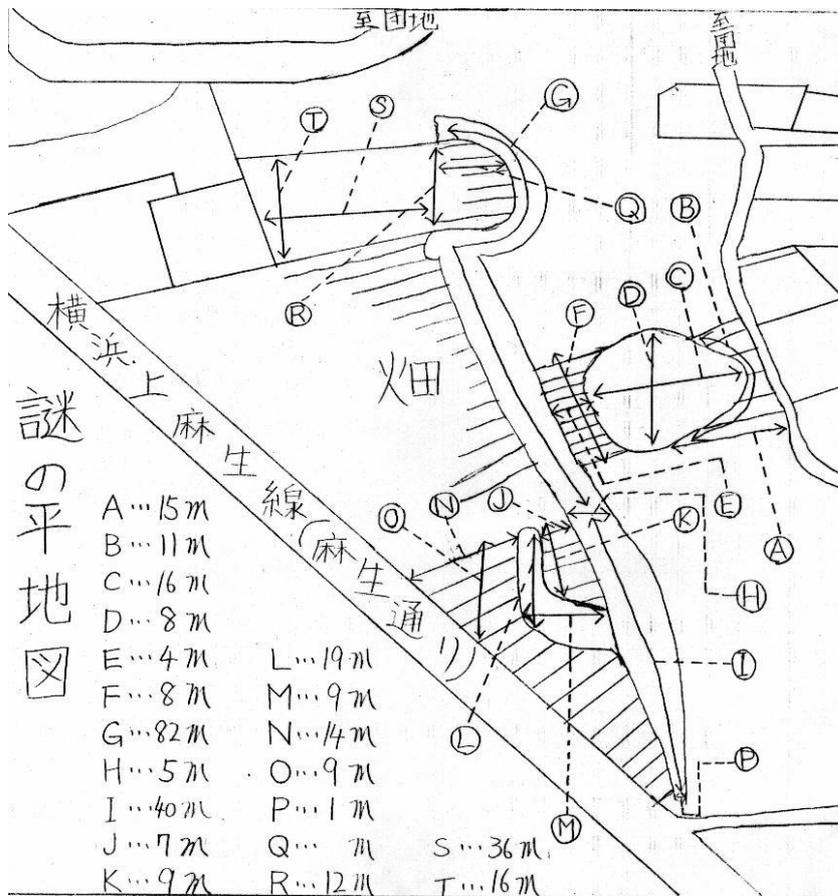
・4月顧問川瀬、西高津中学校に転勤。考古学研究部は現2年生のみの活動とし、1990年3月卒業を以て廃部と決定。それまでの顧問は松永・飯塚が当たる。部長：武内守(2年)

※1988年1989年は、実質顧問が居ない中で88年3月時に1年だったメンバーだけで研究を続ける。実質班は亀井城班(地形班+歴史班)だけ。前顧問とは手紙で連絡を取り指導を受ける。

地形班(武内・遊佐・大瀧・大谷)。

歴史班(佐藤・倉持・保科・新田)。

※前年に地形班が見つけた城遺構を手掛かりに、亀井六郎の来歴(近江佐々木氏の出との資料)調査と小嶋佐渡守の面から、残った新2年生メンバーで亀井城を調べた。



ここから先は、2026年中にも実施が予想されるカルチャ―セミナーのために、部員の佐藤がまとめた資料をもとにとめる。

〈1988年〉

・4月 新入部員を迎えることができず、一同落胆。部活に出ても研究は進まず、ゲームなどして無為に過ごす。
・夏休み。川瀬Tより部長の武内に資料が郵送される。郷土史家の廣川英彦氏（元東柿生小学校校長）の論考「鶴見川歴史・文化シリーズ⑥亀井古城址」〔華沙里通信〕第48号 1988年6月10日発行）のコピー。

この資料により、

① 亀井住宅造成以前に、広範囲に焼けた土石・灰が出土。新田義貞の鎌倉攻めの際に焼失した城の櫓跡か？
② 月読神社裏の崖地に鎌倉武士の「矢倉」があった。
③ 亀井住宅の台地の西北端の鞍部に「堀切」があり、さらにその北の標高82mの地点に「烽火台」があった。

ことが判明。

・2学期。廣川氏の論考を元にその内容を裏付けるため、亀井住宅一体の地主だった鴨志田正樹さん、常安寺の住職、麻生不動尊の奥様に聞き込みを行い、開発前の城址一帯の様子を調べる。

・10月。文化祭。佐藤は「亀井城は小嶋佐渡守の城ではないか」との推論を発表。

〈1989年〉

・1月。常安寺のご住職、小島一也さんに聞き込み。小島さんのご指摘で調査は大きく進展。わかったことは、

① 「腰曲輪」遺構は、開発前はさらに北に伸び、亀井の丘の西側を取り巻いていた。

② 狼煙台と見られる地点の南麓から人骨出土。合戦の址と見られる。

③ 「堀切」はなかった。平らな畑。

④ 亀井六郎が鈴木氏の出であることについては、伊藤韋天『稲毛郷土史』を読むと良い。

⑤ 小嶋佐渡守の妹は、後北条氏の重臣・大道寺駿河守の妻だった。

・4月 最後の文化祭に向けて部員一丸となることを確認。

・5月 川瀬Tより手紙。今後の研究のアドバイス。

・7月 郷土史家・廣川氏が柿生中に来校。様々にご教示を得る。

① 「堀切」の存在は、月読神社宮司・池田正盛氏の証言がある。

② 頂いた古地図と、城址付近の旧地名「城坂」「入生」から亀井城の遺構は後北条氏時代の造営との論の補強を得た。

③ 頂いた論考とお話から、古代から近世にいたるまでの麻生は交通の要衝で、たびたび有力者の所領となり合戦に見舞われたことに気付く。だから城館が築かれた。

・ 7月 三輪に残る後北条氏の城・沢山城址の見学。
・ 夏休み 川瀬Tの手紙。麻生にあった古代牧の存在と関連遺構の教示。

小島一也さんへ手紙でさらなる質問。

・ 9月 小島一也さんから丁寧な返書を頂く。

保科が、亀井六郎と柿生の鈴木一族の関係を調べるため、鈴木忠義さんに聞き込み（小島一也さんの紹介）。

・ 10月 考古学研究部最後の文化祭。

論考として

① 佐藤「亀井城は小嶋佐渡守の城ではないか（その2）」

② 佐藤「亀井城伝説考 大軍事基地麻生の動乱（亀井城はなぜできた）」

③ 保科「亀井六郎は鈴木氏の出身か」

地形班は、亀井城の「謎の平地」の立体模型を展示。三年間で一番の盛況。来場者から鶴見川流域の製鉄についてご教示を頂く。

〈1990年〉

・ 3月 卒業式。考古学研究部の歴史に幕を下ろす。各自別の高校に進学。

・ 8月 「あしあと」第三号発行。1987年度の一年次までの内容をまとめたもの。

※その後の研究を「あしあと」第四号としてまとめたことの意味が出る。

〈1991年〉

・ 1月 川瀬Tからの手紙。

② 「義経記」の資料としての使い方。

② 角田文衛著「奥州平泉黄金の世紀」（新潮社刊とんぼの本）の「平泉と平安京―藤原三代の外交政策」の紹介。平安京の北に奥州藤原氏の出先機関があった。平泉と京都の間に海上航路が開かれていた。義経の第一次下向は「義経記」にある陸路経由ではなく海上航路の可能性あり。

③ 宮前区神木・土橋付近から多摩区長尾付近は太田洪子郷といい、佐々木氏の拠点であったことが、長尾の妙楽寺にある薬師三尊の銘でわかったことの紹介。

③ 「町田市史」にある「牧」の記述の紹介。

川瀬Tとは電話や手紙でやり取りをして研究を進める。3回ほど川瀬Tを囲んでのゼミを開催。

〈1994年〉

・ 3月、1990年3月の廃部のあと、高校生となった旧部員（歴史班の）たちのその後の研究をまとめた柿生中学校考古学研究部の活動のまとめ「あしあと」第四号を発行。

掲載論文は

① 亀井城は誰の城か（その2）。佐藤の論考。今まで研究を集大成し、さまざまな証拠から「亀井城」は戦国時代の

武將小嶋佐渡守の築造を証明。

② 亀井城はなぜ築かれた。佐藤の論考。麻生地区の歴史的由来を検証し、その戦略上の性格から、なぜこの地に城が築かれたのかを論証。

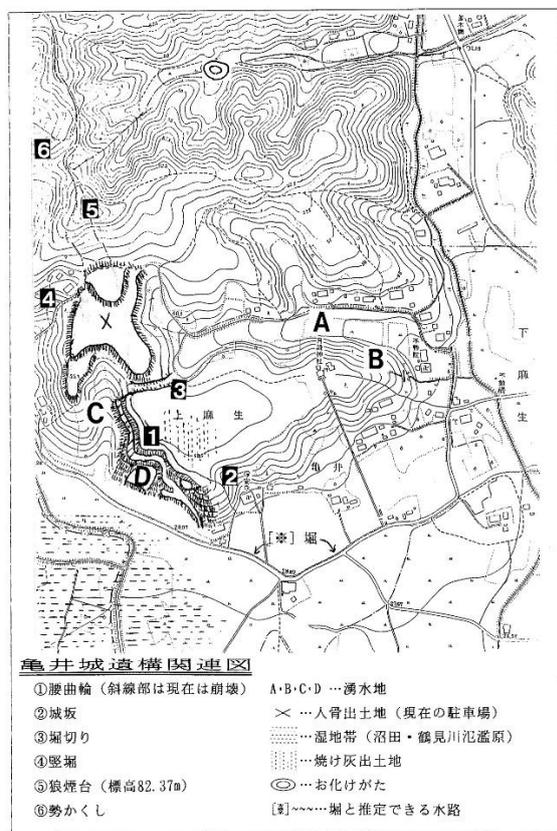
③ 亀井六郎重清と佐々木六郎厳秀は同一人物？ 顧問川瀬の論考。今までの研究を集大成し、亀井六郎重清は佐々木六郎厳秀と同一人物である可能性について論証。

④ 亀井六郎と柿生の鈴木氏の間には関わりがあるか？ 保科の論考。柿生の鈴木氏の歴史を踏まえて検証。

⑤ 亀井六郎は本当に鈴木氏の出自か？ 佐藤の論考。亀井六郎についての諸説を検証。

※これにて柿生中学校考古学研究部による「亀井城」研究は終止符を打つ。「あしあと」第四号は、小島一也さん、鴨志田正樹さん、常安寺住職・磯野さん、郷土史家の廣川さんから、お世話になった方々に贈呈。

※なお小島一也さんは、柿生郷土史料館発行の情報・研究誌「柿生文化」の第62号(平成25年12013年17月刊)掲載のシリーズ「麻生の歴史を探る」第32話で「亀井六郎と亀井城の謎」を取り上げ、ここに1994年3月刊の「あしあと四号」にまとめられた考古学研究部による亀井城研究を取り上げ、「その研究は中学校の部活動を越えたものでした」と評価され、佐藤がまとめた「亀井城跡遺構」図を転載された。



● まとめ

1977年12月の麻生台横穴古墳群の発見以後活性化した歴史研究部の活動は、79年4月には部名を「考古学研究部」に替えて続いた。

だが既にみたように麻生地区の古老への聞き取りによる横穴の発見は78年中にほぼ終わり、以後は81年の春に、市教委からの依頼を受けて麻生地区の横穴古墳群を調査していた東原氏から全横穴の実測を依頼されるまで活動は停滞。81年春から82年夏までは横穴古墳の実測に邁進するも、この活動の終了後はまたもやることなく、活動は停滞。

停滞状況を打開すべく、82年には周辺の横穴古墳群や古墳群を調査するも、新たな考察課題も見つけられず。83年

には方向を転換すべく、江戸幕府編纂の「新編武蔵風土記稿」の麻生地区が所属する都築郡の項を熟読。ここから何か新たな課題がないか模索。

この成果として、84年春には「王禅寺伝説」班が成立。東柿生小学校を取り巻く4つの塚の謎を解きながら王禅寺開闢の謎を解く試み。また85年春には新たに「麻生不動班」と「亀井城班」が成立。麻生の中心にある鎌倉時代に遡れる麻生不動開闢の歴史の解明と、中学校の南、麻生台団地のすぐ南の亀井住宅の地にあつたと言われる亀井城のなぞにとり組む。「王禅寺伝説班」の活動の成果としては、86年10月の市連合文化祭の社会科学の部にて発表した『幻の観音像』―王禅寺伝説の解読(その2)―があり、これを契機として、これらの考古学研究部の新たな活動の成果をまとめた冊子として、86年3月の「あしあと第一号」発行と、87年3月の「あしあと第二号」の発行へと至った。

途中何度も活動停滞期はあつたが、生徒主体の研究活動を長く続けることができた理由は、

①柿生中在職3年目以降はクラス担任もなく、校務分掌も忙しい生徒会本部指導を外れ、学習指導部というほとんど仕事もなく生徒活動の委員会指導もほとんどない状態が、放課後毎日のように横穴古墳を探しての地域探査に同道したり、生徒だけで行った聞き込み調査をまとめたりする時間の余裕があつたことが要因の一つとして挙げられる。

だが、横穴調査が終わってやることなく、新たな方

向を求めて「新編武蔵風土記稿」の学習会を開いた82年83年は私の教育活動の転機にもあつていった。

82年4月に新しい校長が着任し、主任制度化反対闘争として行っていた分会による人事案まとめを新校長が容認したため、管理部長と文化委員会文化祭指導担当になることで、俄然忙しくなった。管理部長は学校施設の営繕管理を統括するので、整備委員を動かして毎月教室の破損点検を行い、それを元に管理部・事務職・校務員で校内を巡って修理箇所を特定し、校務員で出来る修理箇所と業者に依頼する修理箇所を分別して校長の決済を受け、それぞれ実施と、かなり忙しい仕事となった。また文化委員会は文化的行事全般の企画運営を行う部署なので、この副責任者として文化祭の在り方の再検討を生徒会本部と手を組んでおこなったので、ここも日々忙しい部署であつた。さらに翌年には久しぶりに一学年担任にもなつて忙しさは倍加した。

このため放課後に地域に出かけて探査する余裕はなくなつたが、逆に学校で日を決めて「新編武蔵風土記稿」の学習会を実施し、あらたなテーマを見つける作業に専念することができた。

そして新たなテーマが見つければ、あとは各班の生徒のやる気次第である。毎週土曜日の午後には班別の活動報告を行い、調査の進展具合の確認と、今後の課題を見つけ、その課題を深める方法を指示しておけば、あとは各班が地域の図書館や地域の古老を尋ねて探査すればできることだ。

②柿生中での部活動は、生徒に恵まれたと思う。横穴古墳を発見したメンバーを中心にした一年生は、麻生台古墳発掘現場にも毎日顔を出して調査員から教示を受け、さらに発掘品の整理を行っていた高津図書館友の会・郷土史研究部（79年には川崎考古学研究所に改組）にも出入りして教示を受け、中学生ながら考古学の知識を、調査の具体的方法の習得含めて手に入れていった。私も考古学全集を手に入れて古墳の項を熟読したり、横穴古墳についての書物を手に入れて熟読したり、それなりの知識を得ておけば、彼等の活動をサポートすれば済んだのである。

81年82年と行った横穴古墳の実測は、その方法を学んでいた卒業生・古墳の発見者たちに教えてもらい実施したものだ。

そして土日や夏休みを返上して一日横穴の実測に邁進してくれた生徒たち。彼らがいなければ麻生地区の横穴の全貌は明らかにならなかったであろう。

また84年85年から始まる新たな地域史の課題の解明。これも熱心に取り組む生徒なくしては成り立たなかった。

「王禅寺伝説班」は、手掛かりは東柿生小学校の周りにあった四つの塚だけであり、そのうち二つは現存するも、消失した二つも現存のものも学術的調査はなされていないため、それ以上のヒントはつかめなかった。あとは王禅寺自身にのこる伝承と「川崎市史」に記された現存の観音像についての知識だけ。これらもほとんどは図書館にある資料に頼っての

推論だった。そして「亀井城班」の活動もヒントは「新編武蔵風土記稿」のたった一行の記述だけ。地域史のどの本を見てもヒントすらない。この窮状を打開したのは、1987年の地形班による亀井の丘の斜面に残る「謎の平地」の実測だった。この調査は生徒だけの活動。私は忙しくしかも転勤話が勃発して一緒に行くことすらできなかった。生徒らは体育科教員に交渉して校庭にラインを引くための長いメジャーを貸してもらい、あとは横穴古墳実測のために手に入れてあったメジャーや鉄棒などを駆使して、自分たちだけで実測した。この結果「謎の地形」は、丘を取り巻く「腰曲輪」と、ここに至る「大手道」である可能性が強まり、今に残る「亀井城」の遺構は戦国時代のものである可能性が俄然強くなった。

あとは各地に残る戦国時代の城遺構と比べたり、文献で城主とされる小嶋佐渡守の来歴と、平安時代末の城主とされる亀井六郎について各種文献で調査するだけであった。

謎解明まであと一步に迫ったのに顧問の転勤で生徒たちに大きな負担を負わせてしまった。

だが顧問不在の中で、地域の古老や郷土史家の助けも借りながら様々な文献も尋ねて、「亀井城」研究を結論まで推し進めた生徒たちの粘りは見事であった。

この生徒たちの頑張りのすごさは、次の転勤先である川崎市立西高津中学校での歴史研究部活動と比べると際立つ。

2..西高津中学校時代

1988年4月に川崎市立西高津中学校に転任。すでにベテランになっていたので部活動担当はわがままを言って、ほとんど活動のなさそうな書道部の顧問（複数顧問の一人）となるも、ほとんど活動には参加せず。

教師の暴力が蔓延していた学校でも荒れていた。このため一年目に担当した二学年生徒に蹴られてろっ骨にひびが入る。はぐれグループから抜けようとした生徒の一人を他のメンバーが殴って怪我させ、丁度居合わせた私が止めに入ったところ蹴られる。保護者がすぐに警察に届けたので警察で事情を聴かれ、其の際に胸が痛いと気が付き、警官の勧めもあって帝京大学溝口病院を受診。2年目は様子見で担任を外れ、しかも前年3年担当で、学校の荒れの原因を作ったと思しき学年が1年担当となり、ここに副担任として所属。その学年運営の実態を観察。3年目は校長から担任希望者がいないと泣きつかれて担任に復活。一年目に属した中村学年に（この学年が一番生徒に寄り添っていると認識）。木原主任・中村副主任のもと、学年委員会の生徒活動を組織し、学年独自の行事も企画。2年3年と生徒活動主体の学年運営を続け、再び1年担当となった年には、文化祭には空き缶で巨大ロボット「カンダム」を作成。次第に学校運営の主導権を手に入れていく。

この過程の4年目の1991年4月に「歴史研究部」を創設。

この部の創設を3月の主任会に計ったところ「そんな小さな人気がない部では役に立たない」「部活は非行防止のためにこそある」と生徒指導主任に言われ啞然とする。

（1991年）

・4月 2年生（5名）部員でテーマを探し、高津小学校編の副読本を参考資料にして高津地区の歴史を勉強した。その際に大山街道周辺にいくつもの石碑があることに気が付く。
・5月 大山街道を歩いて石碑を見学。二子神社に「謎の石塔」を発見。副読本にも「川崎市石造物調査報告書」（1980年3月刊）にも掲載されていないものだった。

※近所の人に聞くと目の神様で「目を患った人はお参りする」と聞いた。

・6月 二子神社総代の相原常二さんに聞くと、この碑は供養塔で多くの人の寄付で作られたものという。

※石塔の大きさは

地面からの高さ…1 m 6 0 cm

土台の高さ…2 4 cm

文字が彫られた角柱…縦9 6 cm横3 6・5 4 3 cm

上部の笠…高さ2 2 cm 幅・正面6 8 cm側面5 5 cm

※碑の正面には「南無阿弥陀仏」と彫られ、裏面には「時延宝六年二月十五日」と石碑建立日が彫られ、正面脇には「奉一千日」「惣回向」、左側面には「願以此功德 平等施一切」、右側面には「同発菩提心 往生安楽国」と彫られ、正面・裏

面・右側面・左側面には、この碑を建てたであろう人々の名前がびっしり彫り込まれていた。

・6月 何度か高津図書館で調査。石塔の表面を見て分かった範囲のことを分担して調べる。江戸時代の災害年表作成・念仏講とはなにか（杉山・畑中・保坂）、人名と地名（牧野・中村）。

①この供養塔は、昔は元大陸天の所にあつた。新編武蔵風土記稿にそうある。（高津風土記による）大正3年に神社統合で廃止。この時に動いたか（相原氏の話）

②世田谷上町 世田谷新宿のこと。（世田谷の地名による）

③長崎氏 後北条氏の家臣。滅亡後土着したか？（姓氏人名録による）

④和田氏 風土記稿の「今井村」に和田氏あり。鎌倉時代の和田義盛の子孫。

⑤石碑の願文の意味を探る。

⑥念仏講とは何かを調べる。

⑦江戸時代初期の災害年表を作る（慶安元年1648から元禄16年1703年まで）。供養塔建立の目的は災害被害者供養と見て。だが延宝六年2月の前年に関東東北大地震津波とあり、二年前には江戸大火とあるが関係なさそう。

・7月 まず石碑の文字を確認すべく拓本を取り、彫られた文字をすべて翻刻。

・9月 これまでに多くの事が分かる。

①災害は関係なさそう。江戸時代全体の川崎災害年表を作成。

直近は1677年10月の関東東北に地震、1672年5月に多摩川洪水、六郷橋流出だけ。

②供養塔に刻まれた人名153名中103名が苗字あり。つまり以前武士で土着し名主などをした有力農民。

※以上のことは高津図書館に通って郷土史関連の書籍を読んできて明らかになった。この地味でしんどい作業に、西高津中歴史研究部の二年生部員たちは頑張って取り組み、9月時点でかなり研究は進展していた（10月の文化祭で報告か？「調査ノート」には9月までの記録しかなく、あとは不明）。

（1982年）

・4月 10月の市連合文化祭社会科の部に発表するべく研究をまとめようとした所、3年生になった部員全員が、新設のコンピュータ部に無断で転部していることを発見。部員たちは昨年の調査に基づいて結論まで到達する意思はなかった。生徒の転部の意思を確認して、顧問には連合文化祭研究発表の準備と発表のために生徒を借りることを確認。

※しかし生徒がやる気がなく、前年に高津図書館や世田谷区立図書館で地域史の本を調べてわかったことを基にした推論は、ほとんど全部を顧問一人でやる羽目に。

これまでに分かったことは

※石塔には大山街道沿いの12か村の多くの村人の名が刻ま

れており、それぞれの村人を村史を使って調べた。刻まれた村は、南から、新作村・末長村・溝口村・二子村・瀬田村・用賀村・世田谷村・世田谷上町、あと所在不明の村、上〇〇村（上馬沢村か？）・古沢村・石原村・〇里村（中里村か？）。※この村人の中に特徴的な有力者が幾人もいた。名字のある人がとても多い。

①世田谷村の大場家。戦国時代末に世田谷村が吉良家の支配下にあった時代に、吉良四天王の一人として活躍。江戸時代になり世田谷村が井伊家の支配下になるとともに代官に。

②用賀村の和田家。鎌倉の有力御家人和田家の子孫か？

③瀬田村の長崎家。後北条氏家臣で瀬田に城を構えた。鎌倉幕府の執権北条氏の執事・長崎氏の末裔か。後北条氏が豊臣に滅ぼされたあと帰農し、名主を勤める。

※全部で153人の名前が彫られているが、二子村が42人と最大で、次は溝口村の35人、三番目が末長村で27人。この三村で合計104人と全体の三分の二を占める。中心は二子村だ。そして石塔の正面に書かれた「願主」は「二子村の品誉蓮几」。僧侶の様である。

※石塔に掘られた文面の意味。

①南無阿弥陀仏。阿弥陀の称名であり浄土宗系で良く唱えられる。

②奉一千日総回向。一千日にわたって阿弥陀の名号を唱えた功德をたてまつり極楽往生を願うというもの。

③願以此功德 平等施一切 同発菩提心 往生安樂國。浄土

真宗で唱えられる「総回向偈」。

また碑面には「念仏同行中新作村」「念仏同行中溝口村」との文面も見られ、各村々の念仏講が合同して供養塔を立てたと思われる。

※不思議なのは石塔の笠塔婆に武田家の家紋である「四つ菱」が刻まれていること。石塔が建てられたのは「延宝六年二月十五日」。1678年の4月8日だ。武田氏滅亡は天正10年3月11日。1582年4月3日。その96年後。

※二子村は江戸時代に開拓された村で、その開拓の中心は、旧武田家の家臣であった「小山田小治郎宗光」といい、武田四郎勝頼の重臣・小山田備前守の嫡子と伝えられる。この小山田氏は二子村の中心浄土真宗光明寺の住職・菊川氏である。おそらく石塔の正面に刻まれた「願主 二子村品誉蓮几」がその住職ではないか。また二子村の村人の中には小山田氏と共に二子に土着した旧武田の遺臣である「杉野・日比野・森谷・大貫・齋藤・三田・小俣」の名も石塔には見える。

※一見して浄土宗系の念仏供養塔に見えるの。2月15日は釈迦入滅の日とされ、浄土宗系ではこの日に涅槃会が開かれる。だから表面的には釈迦涅槃日に合わせて多くの村の念仏講が共同で千日に渡る念仏供養の功德を願ったように見える。だが、正面に武田の家紋である四つ菱が刻まれて、願主は武田の遺臣小山田氏の子孫。そして最大42名を数える二子村民の中には武田の遺臣の名も。さらに二子村と連合村の關係にある溝口村や末長村・瀬田村など「川崎領」の村だけで

はなくて、「世田谷領」の村々など、旧矢倉沢往還Ⅱ大山街道沿いの旧吉良領の村々の有力者も連携していることが不思議である。単なる念仏講中の供養塔とは思えない。

武田の旧臣である二子村の人々が念仏供養塔建立の中心であることから、滅亡した旧主武田氏の供養が真の目的では？

・10月 市連合文化祭にて研究発表。生徒は原稿を読み上げるだけ。発表後、助言者の大学教授から種々質問を受けるも生徒はまったく答えられず。柿生中学校の横穴調査や王禅寺伝説の解説を発表した際には、生徒自ら原稿を書き、質問にもきちんと答え、逆に助言者の大学教授の説に疑問を持って反論するなどしたと、大きな落差を感じた。

もしこの年も前年に続いて図書館での資料探査や地域の人への聞き込みを生徒主体で遣り切っておれば、「二子神社の念仏供養塔」の研究はかなりのレベルとなり、市連合文化祭と西高津中学校文化祭での研究発表を契機として、2年生1年生の新学期も獲得して、今後の活動の基盤が作れたかも知れぬ。残念なことであった。

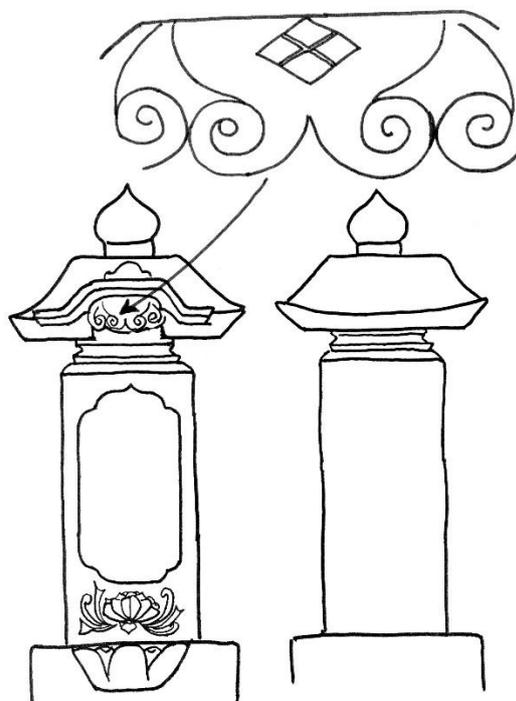


図1：石塔の形と文様



図2：
【石塔正面の
文字】
※石塔の拓本の
写真版をト
レースしたも
の。

城址（大泉寺・12世紀）などを尋ね、戦国時代の城の形式やそれ以前の城の形式を調べ、ここから戦国時代の作延城を推定するも、緑が丘霊園建設で完全に遺構が破壊されているため、全く進まずに終わった。

〈1995年〉

3年生になった部員とともに作延城研究を継続するも手掛かりがなく事実上の休部に。

〈1996年・1997年・1998年〉

※96年4月に新たにたった一人入部した一年生（東）がニケ領用水の歴史に興味を持ち、三年間一人でこつこつと高津図書館に通い、さらにどう支流が分布していたかの図面もないことに気が付いて、久地の円筒分水以南の支流をすべて歩いて確認して写真を撮り、図面を作った。

西高津中の文化祭は、96年から徐々に有志参加を拡大して、98年には全面的な二日間自由な文化祭になった。その98年10月の文化祭にて、歴史研究部のたった一人の三年生部員は、借りた教室の床一面を使って調査した支流のすべてを地図で表示。参観した校長に感心され、閉会式にて、たった一人で三年間調査したことを讃えられた。

〈1999年〉

・3月 ニケ領用水を調査したたった一人の部員が卒業。

・4月に新たに一年生の5人の部員が入部。しかし活動テーマも見つからず、その後溝口商店街の場所に昔あった闇市に少し興味を持ったようなので、聞き込みを行ったが成果は少ない。全商店の徹底聞き込みと図書館での資料探査を計画したものの、継続研究の意思が弱く、事実上休部に。

〈2000年〉

10月に市連合文化祭社会科の部で発表することになったので、丁度2年生部員の一人（部長）が96年から98年にかけて一人でニケ領用水の支流を調べ上げた部員の弟だったので、兄の活動成果をまとめて発表することとしてスライドを使って発表。しかし闇市の研究の再開もならず、部活は休部状態。

〈2001年〉

3年になった部員も辞めてしまい。部員はゼロに。

〈2002年〉

・4月 一年生一人が新たに入部するも、鉄道に興味はあっても地域史には興味全くなし。10月の文化祭には過去の活動記録を展示するとともに、東急電鉄の歴史を調べて展示。

※2003年3月をもって退職することとしていたので、たった一人の部員（2年生になる）は、科学部に拾ってもらった

て、ここで西高津中学校歴史研究部の歴史は終了。

●まとめ

生徒がいけないのでは部活動は出来ず、また少人数いても、生徒自身に主体的に動く意欲がない状態では、顧問も動く気にもならない。放課後はたまった仕事をした。

中村学年を梶子として学校改革を進め、その中で学年としての環境教育への取り組みや文化祭の在り方を変える中で、主導的な役割を果たしていたので、放課後はこの準備にしたい。

また社会科の私の授業では1996年から授業形態を変えて、歴史や公民はテーマを設けての討論とし、地理は調べ学習として成果を発表する形に。特に歴史は下調べと、詳細な授業案を組む必要があつて、放課後はこの準備に没頭したい。こうして生徒がほとんどいないことと、意欲のない生徒が多いことから、本来指導する義務のない部活動に時間を割くことに意義を見出せず、次第に部活自体から遠ざかつて行った。

西高津中学校での歴史研究部活動は、以上みたように、何度も休部状態に陥っていた。原因は、

①部員の熱意不足。図書館でも地味な資料探査や、地域の古老への聞き込み調査に、部員が耐えられず、このためしばしば研究が途中で頓挫し、部員も途中で転部したり、新たな部

員が居ない中での卒業で部員がゼロになり、新年度に新たな一年生部員が入って再建されるものの、前と同じことの繰り返しとなつて休部。これの繰り返しであった。何度も休部の危機に面しながらも新たな研究主題を見つけて、主体的に取り組んでいった柿生中学校考古学部員との大きな違いである。西高津中学校では結局、生徒自身が主体的に取り組んだのは、1996年に入部し、たった一人で97年・98年と二ヶ領用水を調べ上げた部員ただ一人（東）であった。

西高津中学校の久地・下作延・溝口・二子の各学区の町は、麻生の村々と同様に、とても古い歴史のある所で、各所に様々な文化遺構が残り、家庭訪問をした折にも、父母からその家の歴史やその地区の歴史の話を詳しく聞くことのできる地域であった。例えば1994年に担任した一人の生徒の家は、下作延の戦国時代の城・作延城から300mほどの、平瀬川を挟んだ出城の一つに今でも住み、出城のあった丘の頂には神社と江戸時代以来の家があつて、そこに生活している元城主の家であった。そして大正から昭和の時代でも、大八車に炭や野菜や果物を載せて三軒茶屋まで売りにいっていたそうで、これは江戸時代からの習わしだとのお話も伺えた。

ちようど作延城の研究をしていた頃。生徒がこのお宅に伺つてお話を聞いたり、まだ所蔵している鎧や甲や刀などを見せて頂ければ、どんなに調査は進んだことであつたらうか。②教師の暴力が原因で荒れ果てていた中学校。これを立て直すのに全力を傾注せざるを得なかった。このため放課後や休

日を使ってまで部活動に邁進する余裕がこちらになかった。

柿生中学校考古学研究部の目覚ましい活動を支えた二つの条件が、西高津中学校ではなかったのだ。

部活動はそれなりに大きな成果があり、参加した生徒の人生にも大きな影響をあたえる教育活動である。

しかし学校に設置されているため指導を任せられた教員の負担は多大である。

毎日授業が終わったあとの放課後に活動があり、さらには休日である土曜日や日曜日まで活動が組まれる。これでは、教師の主たる業務である授業の指導の準備や、行事や生徒活動などの指導、さらには様々な校務分掌の仕事があるのだが、こうした本来業務に当てる時間を部活動に取られてしまうため、きちんとやりぬこうとすると夜遅くまで居残ったり、自宅に仕事を持ち帰ったりするしかないのだ。

この為一番犠牲になるのは、授業の準備。教材研究や授業案を練る時間がないため、毎日の授業がいい加減なものになる。ために分かりやすい授業にはならず、生徒は良い迷惑である。

そしてもう一つ犠牲になるのは、教師個人としての生活である。

土日迄使われるので、趣味に当てる時間もなくなり、さらに家族持ちの場合では、家族とともに過ごす時間すら無くなる。家族持ちの教員の場合しばしば、奥方は「部活未亡人」

とすら呼ばれていたのだ。

3..全体のまとめ

部活動はやはり当初設置された時期の目論見通りに、学校からは切り離して、地域の文化センターや体育センターに専門の指導員を雇い入れ、文化活動や体育活動に参加したい生徒は、放課後にこれらの地域センターを訪れ、それぞれ専門の指導員から指導を受ける形に移行すれば、教師や学校の負担もなくなるとともに、地域の文化体育活動のレベルも向上し、大学で文化や体育を専門的に学んできた人たちの就職先の受け皿の拡大にもなるものと思う。

地域文化センターや地域体育センターを設置し専門指導員を雇うことを怠って、すべてを既存の学校と教員に丸投げして、教員にその指導に見合う給与を支払うこともなくただ働きをさせて来た日本の教育行政の貧しさにこそ、諸悪の原因はある。

私自身は仕事ではない部活動をする事のおかしさを認識していたが、拒否することはできなかった。

1975年に実施された主任制度化を認める代わりに、神奈川県では1979年には全教員に主任手当と同額の部活動指導手当を支給することとなった。この際にその申請を拒否し、手当てを貰わないという抵抗をする程度に終わった。

だが2013年3月に福岡県の教員5年目の真由子(仮名)

さんが「公立中学校 部活動の顧問制度は絶対に違法だ!!」とのブログを立ちあげ、部活動の問題点を明晰に指摘するとともに部活指導拒否を行っていることを表明するや大きな反響を及ぼした。最初は数名のコメントが入るだけで多くは関係ない悪戯だったが、次第にまじめなコメントが多数寄せられ、13年10月の「部活の問題点12」ではなんとまじめなコメントのやり取りが数十回も続くようになっていった。

そして11月の「中学校教員、辞めます」で一気に600回を超すまじめなコメントのやり取りが続くようになり、やがてライブドアブログ OF THE YEAR 2015 話題賞を受賞して、毎日新聞などにも取り上げられた。そして大学の教育学者の間にもこの主張に同意し支援をする人も出始め、各地に真由子さんと同様に部活指導拒否をする教員も現れて同じくブログを立ち上げ、中には実名でブログを立ち上げて部活指導拒否を表明するものも出てきた。この結果衆議院の予算委員会でも取り上げられ、教員の深刻な過剰労働とともに部活の在り方が問い直されるようになったことは朗報であった。私もこのブログの存在を2014年の8月に知り、以後数年間コメントを続け論議に参加した。

だがこれから10年以上たった今日でも文部省は部活動を見直すことはやらないし、事実上超過勤務が強制されていることにも目をつぶったまま。文部省の対策はただ教職手当てを増額しただけである。この結果ここ最近では教員試験受験者が極端に減り、募集人員に対して応募者の倍率が2倍に満

たない低率となり、さらに採用されたのに辞退する人も増え、全国的に教員不足が深刻となっている。

なんと公立学校は「ブラック企業」であると認知されてしまったのだ。

だがいくつかの地方自治体が問題の解決に乗り出し、部活動の地域移管を目指して、制度設計を始めていることは希望の持てる場所である。

ブログ「公立中学校 部活動の顧問制度は絶対に違法だ!!」の更新は2020年頃をもって終了しているが、引き続き真由子さんのXのアカウントで議論は継続されている。

(2026年2月24日記、3月3日補筆完成)